



かみなりのとき、どうして^{あめ}雨^ふも降るの

かみなりの^お起^{かた}こり方

かみなりは、起^おこり方^{かた}のちがいによって、^{ねつらい}熱雷^{かいらい}、^{かいらい}界雷^{かいらい}などがあります。
 地面^{じめん}が太陽^{たいよう}の光^{ひかり}で激^{はげ}しく熱^{ねつ}せられ、地面^{じめん}近く^{ちか}で暖^{あたた}められた湿^{しめ}った空^{くう}気が、空^{そら}高く上^あがります。その上^{うえ}、上^{じょう}空^{くう}に特^{とく}に冷^{つめ}たい空^{くう}気があつて、大^{たい}気^きが不安^ふ安定^{あん}なときに、積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}（かみなり雲^{くも}、入^{にゅう}道^{どう}雲^{くも}）ができます。このとき^おに起^おこるかみなりを、^{ねつらい}熱雷^{ねつらい}といひます。
 冷^{つめ}たい気^き団^{だん}（同^{おな}じ性^{せい}質^{しつ}をもつた空^{くう}気^きのかたまり）と、暖^{あたた}かい気^き団^{だん}が接^{せつ}しているときに、冷^{つめ}たい気^き団^{だん}が、暖^{あたた}かい気^き団^{だん}の下^{した}にもぐりこんで、暖^{あたた}かい気^き団^{だん}をもち上げます。このとき^あに積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}ができます。このとき^おに起^おこるかみなりを、^{かいらい}界雷^{かいらい}といひます。

積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}は雨^{あめ}を降^ふらせる

積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}は、空^{そら}の下^{した}の方^{ほう}から上^{うえ}の方^{ほう}まで、^{たて}縦^{じゆう}に広^{ひろ}がっています。積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}の上^{うえ}の方^{ほう}は、^{こおり}氷^{こおり}のつぶでできています。積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}の中^{なか}では、空^{くう}気^きが激^{はげ}しい勢^{いき}いで、上^あがったり下^さがったりして、雨^{あめ}が降^ふりやすい状^{じょう}態^{たい}になっています。
 つまり、積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}は、雨^{あめ}を降^ふらせやすい雲^{くも}なのです。台^{たい}風^{ふう}のとき^おに、大^{おお}雨^{あめ}を降^ふらせるとき^あがありますが、台^{たい}風^{ふう}の雲^{くも}も積^{せき}乱^{らん}雲^{うん}からできています。
 ふつう、夏^{なつ}以外^いに起^おこるかみなりの多^{おほ}くは、^{かいらい}界雷^{かいらい}です。熱^{ねつ}雷^{らい}に比^{くら}べて、^{かいらい}界雷^{かいらい}のほう^{なが}が、長^{なが}い時^じ間^{かん}にわたり、雨^{あめ}が降^ふることが多^{おほ}くなっています。熱^{ねつ}雷^{らい}のとき^あなどに、かみなりだけ^なが鳴^なって、雨^{あめ}が降^ふらないこともありますが、^{らい}雷^{らい}雨^うといわれるように、雨^{あめ}もいっしょ^ふに降^ふることが多^{おほ}いのです。（監^{かん}修^{しゆ}・村^{むら}山^{やま} 貢^{きん}司^し）

